

小野田 泰明

Onoda Yasuaki [東北大学大学院工学研究科教授]

プレ・デザインで描いた「新しい東北」の姿

CONTENTS

特 集 : 「新しい東北」を支える地域交流

SPECIAL INTERVIEW

小野田泰明 氏 1

SPECIAL EDITION

久慈市情報交流センターYOMUNOSU(よむのす) 5
 雄勝硯伝統産業会館／雄勝観光物産交流館 7
 名取市サイクルスポーツセンター 9
 みちのく潮風トレイル 名取トレイルセンター 11
 かわまちでらす閑上 12
 東日本大震災・原子力災害伝承館 13
 東北放送株式会社 c-site 15
 高田松原運動公園 17
 女川町立女川小学校／女川町立女川中学校 19

くらしは文化

旧登米高等専常小学校校舎 21

*本誌では略称を用いています。また、一部敬称は略させていただきます。

表紙写真：東日本大震災・原子力災害伝承館

東北大学建築計画研究室の小野田泰明教授は、東日本大震災で大きな被害を受けた釜石市の復興ディレクターとして関わり、市街地の中心部である東部地区では嵩上げをせずに安全な地盤を確保するとともに、商業施設との連携やコミュニティに配慮した災害公営住宅の設定など多面的な計画を実践。被害の酷かった鶴住^{うの すまい}居地区でも、学校やスポーツ施設の計画からラグビーワールドカップスタジアムの計画まで、全体をコーディネートされてきた。東日本大震災の災害対策と復興をめざして設立された復興庁。そこで掲げられたのが、自律的で持続可能な地域社会をめざした“新しい「東北」の創造”だった。被災後10年を迎えるにあたって、小野田氏に「新しい東北」への想いをたずねた。

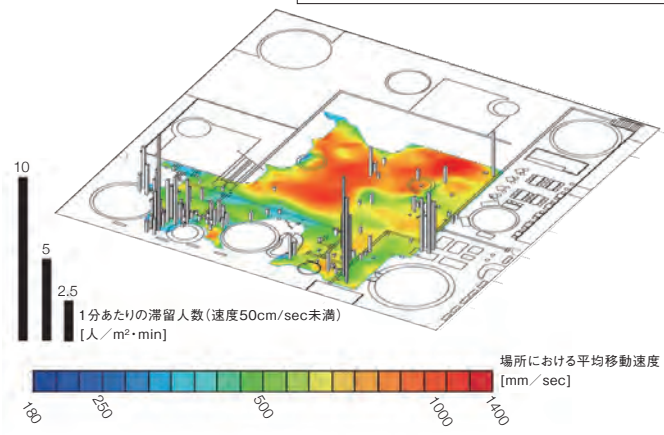
構想から運用までを考える プレ・デザインの考え方

ー 建築計画とはどのようなものでしょうか。

建築計画とは何かとたずねられて、私がよく引き合いに出すのがレストランです。美味しい料理を提供する際、良い食材をレストランに届け、食材を下ごしらえする人がいます。食事を作るシェフを支え、そのための条件を整える、建築計画者とはそのような位置づけです。映画で言うと、映画監督が現場の権限を掌握して撮影を行います。監督が存分に腕を振るって良い作品を作るために、社会的な条件を整えるのが私たちの仕事です。黒澤明氏が脚本を書いて撮影監督もこなしていたように、昔は、スーパー建築家が全てをコントロールすることもありました。しかし、社会が複雑になってリスクの事前チェックが必要になり、品質やコストも厳しくなってくると、良い建築を造るために調整し、先行してプレ・デザインする人がどうしても必要になります。事実、図面段階では、それが本当に良いかが分かりにくいものです。このため、良いといわれている建物に行き、それがなぜそのポテンシャルを維持できているのか、また維持するためにどのような努力がなされているかを調査して、それをフィードバックする仕組みを作る必要があります。米国ではPost Occupancy Evaluation(POE)使用後評価といわれているもので、その建物の問題点や可能性を次の企画にフィードバックして、より良い建築を追求していきます。それを仕掛けているのが建築計画者です。

建物の寿命はとても長いので、発注側で建設を担当する人は経験が少なく、発注側には知見が蓄積しません。一方の建設会社はそれを専門にしているので、素人对百戦錬磨という、情報の非対称性が生まれます。その情報の非対称性を解消するために、建築計画者が発注者に雇われ、ユーザーの視点で計画を検討するのです。公共建築では発注者とユーザーは異なる場合も多いので、ユーザーの声をフィードバックして投資効果を最大化する役割も担います。

せんだいメディアテークでの人間天気図



フロントローディングを建築にも活かす

― 事前の検討が重要なですね。

プロジェクトの初期段階にコストをかけてしっかりチェックしておく、良いものができるという、工業生産ではフロントローディングといわれている考え方があります。私たちは試設計と言っていますが、最初の段階で精査しておくことが重要で、設計者を選定する際も過去の事例研究などを活用して、その施設の可能性を同定した上で、要求水準書を作ることにより、リスクを少なくバリューも出せることになります。優秀な建築家と建築計画者が一緒にプロジェクトを進めれば、いろいろな可能性が生まれます。日本には優秀な建築家が数多くいらっしゃいます。しかし、発注には課題もあると思います。これまでは、施工会社やメーカーがしっかりしていたので、発注側が簡単な仕様書を作るだけでもプロジェクトは進みました。しかし海外に目を移して公共発注を見てみると、それでは良いものができる、プロジェクトが途中で

頓挫することも多い。このため、ヨーロッパでは質の高いものを作るためのガイドラインだけでなく、契約や選定の方法が相当練り込まれています。とくに英国では優秀なエージェントを先行して雇って、さまざまなリスクをヘッジしながら優れた空間資源という社会価値を創り出す技術が進んでいます。私たちの調査では、日本と比べてコンサルタントと設計に4倍の期間と10倍近い金額を掛けながらも、建築のムダが省かれた結果、建設・運営も含めた全体では日本より安い投資で優れた社会資本が実現される事例をいくつか把握しています。日本もそういうやり方を学びながら、次の時代に資産を継承していくやり方を考えなくてはいいけません。

設計通りの効果を実証した「人間天気図」

― 建築計画を手がけられた代表的な件名を紹介ください。

1994年6月、「せんだいメディアテーク」の最初の打合せが東北大学で行われました。その時、市の担当者は市民ギャラリー、市民図書館、映像メディアセンター、バリアフリー情報提供施設からなる複合文化施設を建設することで、市が抱える課題を一気に解決するだけでなく、公開建築設計競技として、貴重な土地を最大限活用したいと説明されました。同時に、市のノウハウは十分ではないので大学の協力を得ながら実現したいということで、私たちが支援することになりました。1995年3月に公開設計競技で伊東豊雄先生による、画期的な建築のアイデアが選ばれました。先生は「人が自由に自分の可能性を開いていく場所なので、壁は造りたくない。壁が無く、自由にいろんな人が出会い、いろんな知識と出会う場所にしないといけない。壁を建てれば部屋としての空間はできるが、原っぱに大きな木が一つあって、その木陰に人びとが集ってくるのも空間だ。私たちがめざしているのはそういう空間なのだ」と語られました。その時「壁がなくなった中で、どのように建築の機能が担保できるんだろう」と思いましたが、建築計画の知見を活用しながら、家具や天井の高さ、床の素材などで、機能を発生させるために何ができるのかを建築チームと一体で追求しました。空間を造った後に、計画通りにできているかを実証するために試みたのが

小野田 泰明氏

1963年金沢市生まれ。1986年東北大学工学部建築学科卒業。1998～99年カリフォルニア大学建築都市デザイン学科客員研究員。2007年より現職。現在、日本建築学会建築計画委員会委員長、石巻市震災復興推進会議委員長。建築計画に参画した代表的な作品:せんだいメディアテーク(2001)、苓北町民ホール(2002)、横須賀美術館(2007)、流山市立おおたかの森小・中学校(2015)、その他、岩手県釜石市、宮城県石巻市、七ヶ浜町、岩沼市、山元町などにおける復興事業。計画・共同設計の作品:荒井市営住宅(2001)、くまもとアートポリス・苓北町民ホール(2002)、丘の家、10-BOX(2002)、東北大学百周年記念会館・川内萩ホール(2008)、伊那東小学校(2009)。著書:『プレ・デザインの思想』(2013)。受賞:日本建築学会賞作品賞(2003)、日本建築学会賞教育賞(2009)、公共建築賞(2016)、日本建築学会賞著作賞(2016)、グッドデザイン賞特別賞(2018)、他多数。

「人間天気図」です。これは、人の動きをカメラで撮影し、コンピュータで処理することで人の動きを天気図のように分かりやすくする、私たちが開発した方法です。ある場所に行くと人の動きが緩やかになって、また違う場所では凄く早いスピードで通り過ぎます。人の緩急の動きと空間の関係が分かるのです。速度が落ちる場所は、ちょっと陽が射していたり、視界が開けたりしていました。遠景・中景・近景と、視界に入ってくるモードが変わるところで速度が落ちるのです。メディアテークの空間は、そういうきっかけに満ちています。こういう細やかな仕掛けの集積が、良い空間といわれているものの正体に近いのではないのでしょうか。

「復興ディレクター」が公募プロポーザルを推進

― 被災地でも建築計画の立場で活動されました。

「たくさんの方が亡くなり、親しい人もいなくなって、悲しいし悔しい。だけど、その人たちに報いるためにも復興はちゃんとしたい。だから力を貸してほしい。金も何もなければ」。そういう人たちに呼ばれて被災地に行きました。釜石をはじめ、七ヶ浜、石巻、岩沼、後には南三陸や陸前高田からも支援してほしいとの依頼を受けています。釜石市では中心市街地を含む沿岸域7km²が浸水し、とくに津波により沿岸部(東部地区)は酷い被害を受けました。釜石市の復興にあたっては、早急に明確なビジョンを市民に示すことで、沿岸部からの人口流出を食い止めることが必須でした。また、復興計画の推進には、専門的なノウハウが必要で、広域な分野にわたる業務を統合的に進めなければいけません。そこで、市のスタッフと協働して復興の促進にあたる「復興ディレクター」という制度を導入しました。制度化したのは2011年10月ですが、それ以前の発災直後から釜石市の中央部・東部地区で、嵩上げしないで安全に復興するために、津波シミュレーションの第一人者である東北大学の越村俊一先生と、バランスの取れたまちづくりのために発災前から釜石の都市計画に関わってこられた都市計画者・遠藤 新氏が、復興ディレクターの任に当たることになりました。そして、みんなが戻ってきたくなる空間の質を担保するために、建築家の伊東豊雄先生に加わっていただき復興を進めてきました。最終的には、緑のマウンドを海側に建て込んで、そこで津波のエネルギーを吸収するように整備しました。並行して、まちの中央に災害公営住宅を多く造ってコンパクトシティにしようと計画しました。このように、短期間に図面を大量に描き、幾度もの交渉を繰り返しながら進めていったのです。また、復興ディレクター制度を活用して、主要事業では優秀な専門家を公募プロポーザルで登用する方針を固めていきました。学校を建設する場合、岩手県では東京湾標準水位から20m以上の標高が求められたので、山を削らないと土地が確保できません。普通なら土木が広い地盤を用意して、その後に建築が入るのですが、今回は切り土量を少なくしながら教育環境としても素晴らしくするにはどうすれば良いかを土木と建築が一緒になって考えました。その結果、鶴住居小中学校では、山全体の掘削に5年かかるといわれていたところを1年半に短縮して、学校もまもなく早く戻すことができました。このプロポーザルでは、それぞれ良いプランを提出していただいたのですが、なかでも秀でていたのが

シーラカンスアンドアソシエイツの案で、土木の理解が秀逸でした。伊東さんと一緒に「これしかないよね」と同意したのを覚えています。釜石市南部の唐丹町の小中学校も同様に山を切ってそこに建てています。こちらは乾 久美子さんと東京コンサルタントのJ.Vですが、とても良いできだと思えます。



釜石市立鶴住居小学校・釜石東中学校



釜石市立唐丹小学校・釜石市立唐丹中学校・釜石市唐丹児童館
2018年度グッドデザイン賞受賞
撮影:阿野太一

想いをともに継承していく

― 発災から10年を迎えたご感想をお聞かせください。

この10年はあっという間でし、これからだという気もします。私たちを呼んでくれた志のある人たちは、人間的に尊敬できる方々でした。たとえば、鶴住居の柏崎龍太郎さんには、本当に助けられました。発災直後、かなり多くの方が、学校は山の中の仮設住宅がある場所に建てようと言っていたのに、私たちが「学校はもとのまちに戻して、まちづくりと一緒にあったほうが良いのでは」と提案したら、「うちの親戚がどれくらい死んだか、わかってんのか」とその場は紛糾しました。その時、龍太郎さんが「まあまあ、そんなにいじめるな。この人はよく分かってないかもしれないが、言うことにも一理ある。まちづくりは長きにわたるものだから、本当に安全な地盤ができて、建築が造れる技術的な裏付けがあるなら、やらせてみてはどうか」と言ってくれたのです。こうして鶴住居では、まちに学校を戻すという流れに一気に変わりました。この復興で東京から戻った若者たちもいて、龍太郎さんが見据えておられたように新しい未来を拓こうとされています。10年経ったから終わりというのではなく、引き続きそこにくらす人びとの格闘なので、そういう人たちと一緒に次の時代を創っていく責任があると思います。柏崎龍太郎さんは残念ながら数年前に亡くなりましたが、さまざまな地域で、若い世代の中から龍太郎さんのように地域を引っ張っていける人が生まれつつあります。私たちも専門家として、そういう人たちと一緒に未来を創っていきたいと思っています。

― ありがとうございます。